瓔（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 16
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 29
俳誌交歓 …… 31
２月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（83） …… 34
恵贈俳誌拝見（48） …… 36
特別作品「東北地震から3年」…… 38
琥珀集作品鑑賞 …… 40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 43
ひこばえ通信 …… 45
別冊100号　会員自選句鑑賞（4） …… 46
他誌転載 …… 48
はなぞの …… 50
エッセイ「たぬきの里」 …… 52
琵琶湖俳句サロン …… 52
イザナミの言語学（14） …… 54
山の辺の道吟行 …… 56

2015/2　第107号

今月の一句

出島見る春の日傘や橋凭れ

桂樟蹊子

（平成二年作）

長崎の出島は江戸時代にオランダ他、外国人の滞在を許したところである。その一人シーボルトは、日本の植物や動物を海外に紹介した人である。出島橋をひとりの女性が渡ってきた。折しも春、その日傘の婦人の橋に凭れている姿に、夢二の絵が重なったとある。「橋凭れ」、は樟蹊子の造語である。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

冬紅葉

塩路隆子

冬灯の小暗さの歩々五条坂

二日月揚げ音羽の冬紅葉

漆黒の大黒冬の月明り

国宝の舞台炎上冬もみぢ

風あらばとよもす冬の紅葉谿

冬もみぢ見下ろす茶屋の串団子

こだはりの七味封切りぼたん鍋

PDF= 俳誌の salon

二月号光耀抄

塩路　隆子選

湯けむりに夢千代像やしぐれける　竹内　悦子
煤逃げに遣はす追手蔵茶房　松岡　和子
木曽嶽に神の吐息か冬の靄　橋本　靖子
水分の吉野の社冬木の芽　山口キミコ
鳶の鳴く群青日和冬に入る　杉本　綾
連歌所の屋根を彩る落葉かな　伊藤　純子
ＬＥＤの青き世界や街師走　森下　康子
義士祭に容赦なき風纏ひ振る　宮田　香
振る舞ひの討ち入り蕎麦や法住寺　松田　和子
約定に交はす割印朱の冴ゆる　伊東　和子
青不動の冴ゆる眼に居竦みぬ　辻　知代子
枯葉舞ふ鯖街道の七曲り　中川すみ子
猫荒るる丹後地方は吹雪かな　吉田　宏之
枯葉散る水軍城址砦岩　伊藤　和子
朴落葉の仮面の騎士や小競り合ひ　中村ふく子
晴着きて鳩飛び発たす七五三　田中　淺子
三彩のコントラストや山紅葉　秦　和子
おほてらの手擦り滑らか紅葉坂　藤本　秀機
み仏もキリスト様も亥の子餅　宮崎左智子

PDF= 俳誌の salon

妻何もうっちゃらかして毛糸編む　山本　孝夫
蓑笠の出迎へ受くる秋の庵　横田　矩子
鼻唄の百寿穏やか小春風　粟倉　昌子
護摩焚きの残り香髪に冬の暮　石川かおり
暮易し神話の里に白き降る　笠井　清佑
檻暗く月の輪熊の影寒き　片岡久美子
南蛮の絵入り茶碗や障子の間　川崎　利子
武家屋敷の客間燦たり照紅葉　北尾　章郎
黄落や打出の小槌ふるやうに　国包　澄子
斜に並む中洲屋台のおでん酒　小西　和子
風花や夢二の描く下がり眉　西郷　慶子
ラムサール条約の浦夕千鳥　坂上　香菜
尼寺の御所人形や雪蛍　坂根　宏子
言ひさして本音呑み込む秋の暮　阪本　哲弘
石山の紅葉彩る源氏の間　笹井　康夫
二日目のべっかふ色の煮大根　塩路　五郎
古戦址に立ちて冬日を分かつ湖　鈴木　照子
庭師きて冬の姿を作りだす　辻　香秀
手の中に団栗といふ故郷かな　伊藤　憲子
冬霧に水墨世界川下る　飯田美千子

PDF= 俳誌の salon

懐の「お足」駈け出す師走かな　小林　久子
訥々とまたぎの語り薪爆づる　黒住　康晴
星近き里に居並ぶ十夜柿　福本すみ子
ずっしりの松葉蟹提げ０番線　佐用　圭子
舞ひ降りて背黒鵐鴒尾を振れる　鷲見たえ子
無国籍料理も交へ年用意　藤見佳楠子
露天湯に小雨輪を描く冬ぬくし　伊庭　玲子
訪ぬれば紅葉舞ひけり一葉忌　西田　史郎
錦秋の包む嵯峨野路昼下り　宮越　久子
スケッチを一時中断時雨来る　井口　淳子
ざくろの実煮出すくれなゐ染工房　人見　洋子
美濃和紙の少し贅沢白障子　増田　一代
初雪の予報聞く夜やキルト縫ふ　松田　洋子
リーダーは腕白さうなマスクの子　三川美代子
国宝の千手観音時雨聞く　宮濱　安子
和菓子舗の暖簾を揺らす菊の風　森田　利和
路地よりの餅搗の音絶えしまま　山下　潤子
寒菊や小さき妣の立ち姿　山本　丈夫
城跡の石垣高し冬の空　山崎　里美
着膨れてあら汁啜る浜の茶屋　山田　愛子

PDF= 俳誌の salon

茶の花は心の翳にこぼれける　稲田　和子
落葉して村は丸ごと眠りける　岩梶　隆子
生きるとは不思議なものよ稽の田　大島みよし
名乗りつつマスク外せば人違ひ　大堀　賢二
三百年の松に今年の菰巻かれ　大松　一枝
高倉健逝きて北国雪だより　桂　敦子
煤けたる網代天井冬日差　木戸　宏子
風神の操る木の葉思ふまま　佐々木和子
かごの中毛糸の玉と文庫本　杉田　福
水音は懸樋の水車紅葉径　高谷　栄一
山里のひと際目立つ柿のれん　高屋喜美子
真夜中の電話おぞまし十二月　谷口　俊郎
赤提灯の暖簾潜りて晦日蕎麦　津田　富司
干大根釣鐘堂を囲ひけり　十時　和子
テーブルに青き檸檬をひとつ置く　中井　弘一
銀杏を割る細心の力もて　中井登喜子
木々の性あらはに紅葉アラベスク　中本　吉信
濃淡の紅葉色なす渓谷美　西垣　順子
袴着のかしこみかしこむ禰宜の前　西村　敏子
桐一葉落つる渓谷舟下り　能勢　栄子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

火消壺　松岡　和子

「ふるさと」の音符なぞりて吊し柿
霧動く山動くかに走るかに
熾真つ赤五衛門風呂の火消壺
冬麗や誰より峡に深く住み
産土へ燃ゆる紅葉の影を踏む
煤逃げに遣はす追手蔵茶房
尼寺にいただくお薄青木の実

神の吐息　橋本　靖子

明けきらぬ街黒ずみて冬の塔（東寺）
窓を打つ冬の雨粒木曽路かな
初時雨しなの五号に身をゆだね
トンネルを抜けて漆の郷や冬
木曽嶽の神の吐息か冬の靄
此の辺り寝覚めの床よ紅葉散る
裸木の纏ふ山靄小淵沢

師走　竹内悦子

湯けむりに夢千代像やしぐれげる（湯村温泉）
源泉に茄で卵待つ宿羽織
山眠り全室灯る湯宿かな
峪沿ひに白菜畑の畝伸ぶる
冬の海自衛艦ゐて静かなり（舞鶴）
セーターに蟹の匂ひや旅帰り
師走とて妣の命日忘るまじ

PDF= 俳誌の salon

年流る

山口キミコ

百回の万葉講座年流る
み吉野の桜眠るや冬木立
水分の吉野の社冬木の芽
若冲の墓の天蓋冬もみぢ
小春日や稲荷神社の三狐神（みけつ）
なす事の渦巻く今朝や十二月
家事放れ主婦の集ひや年忘

群青日和

杉本　綾

新米はなほふる里の日の匂ひ
前山の紅葉俄に迫り来る
鳶の鳴く群青日和冬に入る
競ひ合ふ盆景シニアの文化祭
二代目の方が不器用松手入
綿虫や日は愛宕へと沈み落つ
来年も会おうと握手年忘

落葉

伊藤　純子

連歌所の屋根を彩る落葉かな
銀杏落葉ブーツ闊歩の御堂筋
牡蠣舟の灯に中之島暮なづむ
海光の連れくる風や蜜柑照
園児らに占領さるる蜜柑山
環状線の車窓に流れ冬紅葉
終ひ湯に寿命延びたる寒夜かな

ＬＥＤ

森下　康子

身勝手はかんにんしてね葛湯とく
ＬＥＤの青き世界や街師走
極月や手放せぬもの増えすぎて
近道に得した気分枇杷の花
煮魚の身のほろほろと十二月
子は天使と思うたる日々おでん酒
口のみが達者と言へりちゃんちゃんこ

PDF= 俳誌の salon

冬珊瑚　宮田　香

柔かな陽に真赤なり冬珊瑚
綿虫や無口ふたりの散歩道
炊飯器に丸ごと入るるせいこ蟹
狐火や墓地ひび割れの地震の跡
電飾の木々のまばゆさ京師走
義士祭に容赦なき風纏ひ振る
小児科に太めのサンタ百面相

法住寺五句　松田　和子

忠誠の四十七士や師走寺
振る舞ひの義士会の蕎麦法住寺
粛々と写経の古寺や初氷
法皇の身代り不動堂冷ゆる
つつしみて方丈膳や寒日和
晩秋の似合ふ館の薄灯り
「ありのまま」の児等の熱唱クリスマス

将軍塚　伊東　和子

ふる道の日差まつたり小六月
冬めける将軍塚や雲低き
秋しぐれをいくたび京の由緒塚
学ぶこと尽きぬ七十路実南天
蔵出しやゆたかに醸す新酒の香
約定に交はす割印朱の冴ゆる
落葉して素赤となりたる木々の影

寒雀　辻　知代子

宅配の路地を駈けゆく師走かな
星の夜の電光の綺羅聖樹立つ
寒雀林泉の小枝をゆらしける
青不動の冴ゆる眼に居疎みぬ
浄土めく落葉五色のをんな坂
茅葺きに色足す茶屋の冬もみぢ
音冴ゆる堰千条のきららかさ（嵐山）

PDF= 俳誌の salon

南禅寺

中川すみ子

鯉食べに迎へのバスや小六月
もみぢ葉の赤きの囲む塔高し
湖の上に光を落とし時雨けり
夕日さす三井の御手洗散紅葉
ぎんなんの実やかぎろへる南禅寺
白波の忙しき湖や十二月
枯葉舞ふ鯖街道の七曲り

小春

吉田　宏之

山茶花や昭和の二大スター逝く
懐かしきけんちん汁や妣の顔
小言など聞かぬ一日小春かな
時雨るるや長信号の交叉点
猫荒るる丹後地方は吹雪かな
手酌酒反省多き年暮るる
木洩れ日やグラデーションの紅葉散る

別子銅山

伊藤　和子

枯葉散る水軍城址砦岩
教会の聖樹点灯暮のミサ
右近像仰ぐシスター冬うらら
枯野道栄華を語るむかし井戸
住まぬ家朽ちしままなり枯むぐら
潮流の渦の海峡冬嵐
トロッコのきしむ銹音秋深み

朴落葉

中村ふく子

裏参道風と戯むる落葉かな
大仏に祈り歳末募金箱
冬嵐風鐸打ちて過ぎにけり
朴落葉の仮面の騎士や小競り合ひ
櫨の実や仰げば淡き昼の月
つくばねの実の旅立ちや一茶の忌
山脈は眠りにつきぬ宇陀の里

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

顔見世　小林　久子

顔見世や待ってましたとおほ向ふ
世に背き遊女の命雪と化し　（曾根崎心中）
竜馬伝しぐれに濡るる隠れ宿　（寺田屋）
熱燗やをんな河童に魅せらる　（黄粉挽清水崑）
懐の「お足」駈け出す師走かな

またぎ　黒住　康晴

訥々とまたぎの語り薪爆づる
曇天を背負うて鳴ける冬鴉
白菜に包丁隠れ板に音
大根焚の煮上り会話途切れける
冬ざれや居場所を探す野良の猫

十夜柿　福本すみ子

舞ひ上ぐる枯葉の土産走行車
星近き里に居並ぶ十夜柿
粕汁の香に酔っぱらひ夕支度
老ふたり支へあってのもみぢ坂
枯葉被て笑み満面の地蔵尊

蟹　佐用　圭子

死に急ぐことなしけふの秋日和
ずっしりの松葉蟹提げ０番線
ライオンが湯を吐く宿や冬初め
杉玉や利酒といふ時間待ち
モスク訪ふ人と遭ひけり冬の虹

千成ひょうたん　鷲見たえ子

願かけの千成ひょうたん冬日和
舞ひ降りて背黒鶺鴒尾を振れる
冬深し江戸世のままの割烹舗
苔を被て大きかや葺冬の景
講座終へ喉をうるほす生姜湯

PDF= 俳誌の salon

二月号月評

塩路　隆子

今月の月評は琥珀・瑠璃集の上位に焦点を当ててみる。

湯けむりに夢千代像やしぐれける　　竹内　悦子

兵庫県美方の湯村温泉の歴史は古い。古くから、美方牛が美味しいのは、この温泉のお蔭という説もあるが、日本海の魚の美味しい所である。沸点に近い熱湯が湧き出ており、冬であれば松葉蟹の美味しい温泉地である。荒場近くには、映画「夢千代日記」で有名になった夢千代像が建てられている。湯けむりが立っている上に、時雨に煙る温泉町。シャッターチャンスのよい歯切れの良い句に仕上がっている。

煤逃げに遣はす追手蔵茶房　　松岡　和子

俳諧味のある句である。煤逃げをした人に追手を差し、向けると言う滑稽さ、表現の面白さに思わず吹き出してしまう。しかも蔵茶房という措辞が、古式然とした「遣はす追手」と言ってのけた機知にぴったりの表現、調和のいい面白い作品に仕上がっている。大切にして頂きたい一句である。

木曽嶽に神の吐息か冬の靄　　橋本　靖子

木曽嶽の思いがけない噴火で多くの命が奪われたことは周知のことである。作者はたまたま、木曽を訪れる機会に恵まれた。「木曽嶽は」と見やったところ、冬の靄がかかり全く見えなかった。作者は嶽を隠している靄を、「神の吐息」と捉えられた。面白い把握である。神の手で抑えられなかった噴火と、救えなかった人々の命に、神は深く吐息を漏らしていると言う作者の把握が面白い。亡くなった人達への哀悼の意を込めた句である。

水分の吉野の社冬木の芽　　山口キミコ

奥吉野には古式な水分神社がある。水分とは水配りの事で水の分配を司る神である。みくまりが、身ごもりと転化して子宝、安産の神として篤い信仰を集めている。本居宣長も霊験によって生を享けた一人とされている。神前には乳型が供えられているのも珍しい光景である。「冬木の芽」の措辞が安産、ひいては子育てに連想が広がる動かせない季語の選択である。

PDF= 俳誌の salon